「だんらん」特別寄稿 ①

大人に必要なことは、子どもの要求に応えることを『がまん』すること

古田　哲也

今の子どもは昔の子どもと違う、とよく言われます。

すぐ弱音を吐く、親の言うことを聞かない、食べ物の好き嫌いが多い、ひ弱…。

園や学校でも、約束が守れない、先生の言うことを素直に聞けない、給食の嫌いな献立には、はしをつけない、そんな子が何人かいます。

こうしたことの原因として、都市化が進み、地域での人間関係が希薄になったこと、モノが豊かになり、欲しいモノが比較的容易に手に入るようになったことなど、社会が変化したからだと言われることがあります。はたしてそれだけでしょうか。

今の子どもに一番欠けているのは「がまんする」ことではないか、と私は思います。

嫌いなピーマンをがまんして食べる、少々のすり傷ぐらいなら痛くてもがまんする、欲しくてたまらないものがあっても少しの間がまんする…。

そういう『がまん』ができない子が少なくないように思います。それは、われわれ大人の責任ではないでしょうか。

子どもが「ピーマンなんか食べたくない」と言えば、「栄養は他の野菜でもとれるのだから」と許してしまう。転んでひざをすりむき、「痛い」と泣けば、「かわいそうに」とばんそうこうをはり、包帯をまく。「ゲームソフトが欲しい」と言ってだだをこねれば、「うるさいなあ」と言いながらも買い与えてしまう。

このように子どもの言い分を安易に認めてばかりいると、子どもは「自分が要求したことはすべてかなえてもらえる」「やりたいことはすべてできる」と思い込んでしまいます。これは恐るべき誤解です。

保育園、小学校、中学校と成長するほど新しく経験することや学ぶことが増え、子どもの世界は広がります。

世界が広がるほど、『やりたくてもできないこと』や『やりたくなくてもやらなければならないこと』、すなわち『がまんしなければならないこと』が多くなります。「わがまま」は通らなくなるのです。

こうした経験を積み重ねることによって、子どもたちは「社会性」を身につけていくのです。人は社会の中でしか生きられない動物ですから、「社会性」は人として身につけなければならない必須の能力